ふるさとかわら版 ⑪ 庶民の暮らし

先回は江戸時代の農民の小作階層の暮らしについて書きましたが、今回は庶民、町民の暮らしぶりを見てみましょう。

食べ物

食べ物は一汁一菜が原則でした。例えば主食にみそ汁と野菜のあえ物です。主食は現在のような白米はまれで、たいていは更け米、傷米のかゆか混ぜ物でした。そのために栄養状態は悪く、平均寿命は三十歳代後半だったという人もいます。

飲料水は中ノ口川からくみ上げてろ過した程度の水を用いていました。そのため細菌を含んでいることもあり、しばしば伝染病が流行しました。藩ではこのようなときは医師を派遣しましたが、現実には流行の自然終息を待つのが精いっぱいでした。病原菌という考えはなかったようです。

衛生

長屋のトイレは共同で、衛生的ではなかったようです。近世になると、人糞や尿を肥料に用いたので、かなりその管理がよくなったのですが、それでも悪臭が漂い、はえが飛んでいたようです。

町家と借家

町方には町家と借家の身分階層がありました。一戸建ての住宅に住む人たちは本家格の商人や資産家、技術者などで、使用人を抱えていました。また、そのような階層の人々の多くは長屋を経営し、町役人を兼ねていました。そのため、借家に住む人々は大家から公私ともに管理されていたわけで、本家階層に隷属する関係にありました。彼らが町の政治に参加することはありませんでした。

長屋の様子は映画やテレビでよく出てきますからお分かりと思います。長屋に住んでいたのは小商い、職人、労務者など、日銭稼ぎの人たちでした。このような人たちが町方の経済を支えていたとも言えるでしょう。

服装

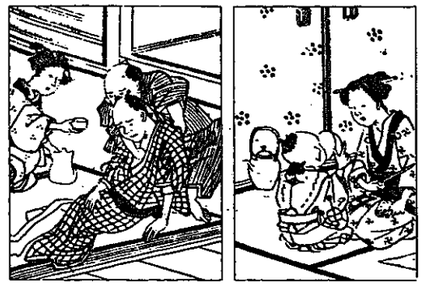
服装も本家・借家の階層では異なっていました。法的には二つの階層とも同じように木綿藍染めに規制されていましたが、現実には本家は高級なカラフルな着物を、借家は木綿の藍染めを着ていました。ですから一目で階層が分かったようです。

借家階層はたいていは夏・冬の粗末な着物二枚を持っていたくらいでした。綿入れの布団など夢で、夜着を重ねて床に入るのが常でした。

日課

借家の人たちは、たいてい日の出に起き、その日一日の日銭稼ぎを終わり、日の入りとともに眠るのでした。それは油が高価であったために夜更かしができなかったのです。

集会・娯楽は認められない決まりでしたが、こっそりとかけ事などで楽しみを見つけていたようです。



▶当時の民間療法（白根市史巻7）

今時代、学ぶ生 ⑤

教育委員会社会教育課
佐藤正則

生涯〝教育〟と生涯〝学習〟

「教育」という言葉に、皆さんはどんなイメージを描かれるでしょう。ともすると、一方的に知識の伝達を受けるというイメージが強く、個人の主体性を尊重するという印象は薄いのでは？

このことは、これまでに紹介してきた、人間は生涯にわたって自分の選択で学び続けるという考えに基づけば、ふさわしくありません。そこで、「教育」の代わりに「学習」という言葉が使われるようになりました。現在は、学習者の側に立った場合「生涯学習」と、市民が学ぶために行政などが条件整備をするような場合に「生涯教育」と、使い分けられています。

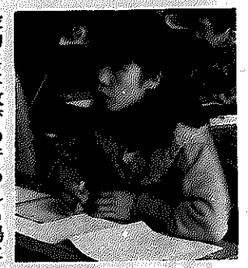
〝社会教育〟と〝生涯学習〟

教育基本法では社会教育を、学校で行われる教育以外のすべての教育、としています。しかし、一般的には教育の行われる場によって、家庭教育・学校教育・社会教育という分け方が定着しています。ですから社会教育とは、家庭と学校を除いたところで行われる教育のすべてと考えてよいでしょう。

生涯学習はこの三者をすべて含んだ考え方です。また、これまで教育や学習という考えの中に含まれなかった自由な個人的活動やスポーツ、さらに趣味・娯楽などの中に楽しみや生きがいを見いだす主体的な活動までもその範囲としているのです。

〝生涯学習〟は生活と学習の結合

「生涯学習」を考えるときは、「学習」のほうにも注目したいものです。自分の考えで自ら学び取る学習の中身を、一人ひとりが進んで考えることがたいせつなのです。学習を、遊びや労働、消費など、人間生活のあらゆる活動を通して学び、成長することと考えたらどうでしょう。このように、生活と学習が結び付いている状態こそが、これから求める生涯学習の姿だと思います。



▲生涯学習研修会で

室戸台風で倒れた藤の老木

私の思い出 あの時 この場所

第2室戸台風（昭和36年9月16日）

万年諏訪神社

語る人
泉　博さん
（万年・七十六歳）

我が村の諏訪神社の神木ともいうべき杉の大木に絡みついた藤の老木は、昭和三十六年の室戸台風で無残にも倒れてしまいました。それまでは、五月の花期になりますと紫の花を全面に垂れて、それはとても壮観なものでした。私たちが小学生のころは、花期になるときまって先生に連れられて花見に来たものでした。

長い年月を経ているので、太い枝が地に着かんばかりに垂れ下がり、ぶらんこにしてよく遊んだものです。幹は平べったいようでして、朽ちて三本になっていましたが直径は一メートルくらいあったようです。また、藤が絡まっていた杉の大木は、台風で根こぎにされたので、切り口の年輪は外皮近くになると、紙を重ねたようでした。定かではありませんが、三百七十年くらいだったと記憶しています。

台風の被害を受けなければ、今なお、あのみごとな花を楽しませてくれたであろうと思うと、残念でなりません。最近大郷のサルスベリの大木が、市の天然記念物となりましたが、今はなきこの藤の老木も、天然記念物に値するものだったと思っています。

私の一冊 No.3

「人間の運命」
芹沢光治良
新潮社

大谷龍吉さん
（砂押1・65歳）

私を読書の世界に導き、小説を愛好させるようになったのは「人間の運命」でした。ずいぶんと前に読んだものですが、いまだに強烈な印象が残っていて、人生というものを深く考えさせられました。

この小説は作者が六十五歳という高齢にもかかわらず、その後七年にわたって書き下ろした、三部・全十四巻の大河小説です。読む人をして深い感動を与えずにはおかない、すばらしい自伝的長編小説でもあります。再読したいと思っていますが、十四巻全部そろっているところはないものでしょうか。

なにはともあれ、通俗小説にしろ文芸物にしろ、読書に老化防止と生きがいの指針を求め、図書館通いをライフサイクルとしています。

市立図書館新刊案内

市立図書館　☎373-2810

神宿る手（宇神幸男）　目黒署10人の刑事（佐々淳行）　忘れ蝶のメモリー（新井千裕）　毒薬の輪舞（泡坂妻夫）　マリアごろし異人館の字謎（多島斗志之）　彼女はたぶん魔法を使う（樋口有介）　高円寺純情商店街本日開店（ねじめ正一）　薔薇の名前上・下（ウンベルト・エーコ）　狼たちへの伝言（落合信彦）　帰りなん、いざ（志水辰夫）　源氏物語（瀬戸内寂聴）　常勝思考（大川隆法）ほか多数

原稿募集

▶私の思い出　あなたの心に残るあの時の思い出をお寄せください。▶私の一冊　あなたの愛読書をご紹介ください　▶あて先　白根市役所広報広聴係（〒950-12 白根市大字白根1235・☎373-2111㈹333）　皆さんのお便りをお待ちしています